

【課題】

社会内においてAI（Artificial Intelligence：人工知能）が活躍するようになって久しいが、AIによる法の在り方の変容に言及した文献として、小塚莊一郎『AIの時代と法』（岩波新書・2019年、以下「本書」という。）がある。本書では、現在の法体系が、取引形態として「モノ」を、取引対象として「財物」を、取引のルールとして「契約」を、それぞれ前提としているが、AIを中心として進んでいるテクノロジーの進化により、経済活動の重点が、①モノからサービスへ、②財物からデータへ、③契約から技術へと変化し、その結果として、現在の法体系と経済活動に齟齬が生じ、「法が社会の変化に追いついていない」ことで、法が変革を迫られている問題点が明らかになってくる、と指摘している（本書18頁以下）。加えて、これらの変化が、④国家が経済活動や社会の在り方をコントロールする法（公法、経済法）も大きな影響を受けると指摘している（本書162頁）。

本書を読み、次の2点について合計3000字から3600字のレポートにまとめなさい（配点割合につき、1が4割、2が6割）。

- 1 (A) なぜ①ないし④のような変化が生じるのか、また、(B) それぞれの変化により、現状の法体系にどのようなほころびや変化が生じてきているのか、著者の考えを要約して説明しなさい。
- 2 本書が「法が社会の変化に追いついていない」と指摘するように、「法と社会のズレ」は常に存在する現象であるが、それが大きくなるためにはどうすればよいか、また、それが大きくなった場合、どのように対処すべきか、あなた自身の考えを論じなさい。

以上